

『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」授業づくり春季セミナーレポート No.5-①

南国市立香長中学校 授業研究会

令和2年1月31日(金) 英語科 第1学年

「Mike's Visit to Washington, D.C.」中島 夢翔 教諭



新学習指導要領の主旨の実現に向け、今、資質・能力ベースの授業づくりに、積極的にチャレンジすることが求められています。本授業研究会では、教科指導に期待されていることは何かを参加者と考えていくとともに、一人一人の教師が自分自身の近未来を描き、自分の目標に向かって学び続ける場となることを目指しています。

本時の目標

- ・クラスの仲間がそこに行ってみたくなるように、高知や日本のおすすめの場所について、自分が伝えたい内容をまとめ、メモなどを活用しながら、簡単な語句や文を用いて、40語程度のまとまりのある文を書く。
- ・相手からの質問をもとに、加筆・修正して、再構築しながら表現する。

単元末で目指す子供の姿

既習の知識、技能、体験を基にして、相手に配慮し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章で書くことができる。

また、書き表したものをペアやグループになって聞いてもらったり読んでもらったりしながら、伝えたい内容を深め、より良いものへ再構築しようとしている。

最終板書

ここがポイント!

書くことの思考は、対話的な学びの中で繰り返し書く活動を通して形成されていきます。本単元では書くことの言語活動を前半と後半に分け、前半は主に目的、場面、状況等に応じてペアでやり取りすることを通して、簡単な語句で言い換えたり、一文を数文に分けて表現したり、具体例を入れるとうまく伝わるのではないかななどの視点に気付かせながら、話した内容を書くことで、見方・考え方を育てていきます。後半は前半で培ってきた見方・考え方を働かせながら、まずは一人で思考して英文を作成しペアで共有します。そしてペアから出された助言を基に、さらに推敲して書くという活動を単位時間の中で繰り返し行い、質的向上を図っていきます。

しかし、生徒達が互いの文章の質の向上を促すような質問や助言を行うことは困難であるため、伝えたいことを英語でどう表現するのか考えさせるだけでなく、生徒達が常に「いつ、どこで、だれが、何を、どうした」を意識しながら全体の構成を考えたり、文構造に気を付けたりできる支援が求められます。そうすることで質の向上を促すような質問や助言が可能になり、生徒自身が意図をもって思考し、やり取りしたり、英文を書いたり読んだりすることができるようになります。

このように質の向上を図ることができる共有とその後の推敲を、単元を通して繰り返し行うことが重要です。

『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業 授業づくり春季セミナーレポート No.5-②

南国市立香長中学校 授業研究会

令和2年1月31日（金） 数学科 第1学年 「データの活用」 辻田 文弥 教諭



本時の目標

不確定な事象の起こりやすさについて相対度数を確率とみなし、傾向を読み取って表現することができる。

最終板書

ある中学校売店の靴のサイズ

めあて 過去のデータから各サイズの上履きをどれくらい何足入荷するかを考えよう

【問題】来年度の新入生(210人)のために靴を入荷したい。どのサイズを何足入荷すればよいだろうか？

データの量が大きいほど信頼できる
⇒ 7年分の合計

過去の3年間の合計

サイズ	個数
21.0	1
21.5	9
22.0	32
22.5	50
23.0	107
23.5	109
24.0	67
24.5	48
25.0	42
25.5	39
26.0	19
26.5	15
27.0	6
27.5	3
28.0	1
合計	548

2017年度

サイズ	個数
21.0	0
21.5	3
22.0	11
22.5	17
23.0	36
23.5	37
24.0	25
24.5	17
25.0	15
25.5	13
26.0	8
26.5	4
27.0	3
27.5	2
28.0	0

2018年度

サイズ	個数
21.0	1
21.5	9
22.0	12
22.5	17
23.0	34
23.5	38
24.0	22
24.5	15
25.0	14
25.5	16
26.0	5
26.5	6
27.0	2
27.5	1
28.0	1

2019年度

サイズ	個数
21.0	2
21.5	12
22.0	16
22.5	20
23.0	37
23.5	34
24.0	20
24.5	16
25.0	13
25.5	10
26.0	6
26.5	4
27.0	1
27.5	0
28.0	0

まとめ
過去のデータから毎年ほぼ同じ傾向がみられるので、相対度数を確率とみ替えて判断できた。

23.0cmは何足入荷する？
おん、おん、
23.0 = 107 = ?
相対度数
107 ÷ 548 = 0.195
210 × 0.195 = 40.95
FIRE
107 ÷ 548 = 0.195
210 × 0.195 = 40.95
FIRE
107 ÷ 548 = 0.195
210 × 0.195 = 40.95
FIRE
107 ÷ 548 = 0.195
210 × 0.195 = 40.95
FIRE

ここがポイント！

「データの活用」領域の学習においては、何らかの問題を解決するという目的を設定し、そのためにデータを収集し、データの特徴や傾向に着目して分析することで問題を解決を図るということが求められます。①その際、目的が曖昧なままに指導者が次々とデータを提示して表やグラフに整理させる展開にならないようにすることや、②問題解決の過程を通して、ヒストグラムや代表値、相対度数等を求めることができるようにすることに留意する必要があります。

本時では、「できるだけ余りや不足が出ないように新入生の上履きを準備するには、どのサイズを何足ずつ入荷すればよいだろう」という悩みから、過去3年間分のデータを分析することを通して結論を導きましたが、その過程において、何を解決したいのかを生徒が常に明確にもっておくことが鍵となります。そのうえで、「1年間分のデータにだけ着目するのは妥当ではないので、さらに多くのデータを集めることが必要なのではないか」、「過去3年間それぞれの年ごとに分析したものと、3年間をあわせて分析してみたものを比較することで、より合理的な判断が得られるのではないか」といった気づきを基に問題解決に向かわせたいものです。さらに、本時の終末の「不足が出ないように、合わせて30足分余分に仕入れておく」という場面において、「各サイズの相対度数を確率とみなして、どのサイズを何足ずつ仕入れるかを予測した」という学びを生かし、余分に仕入れる30足をそれぞれのサイズに振り分け、得られた結果を見直していくといったことも生徒に経験させたいことです。

『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」授業づくり春季セミナーレポート No.5-③

協議の視点

- ◆単元末で目指す子供の姿が実現するような単元構成であったか。
- ◆本時において、見方・考え方を働かせた学びができていたか。



「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクトを check !



【中部教育事務所】【小中学校課】

授業リフレクション

授業リフレクションでは、「言語活動を繰り返し積み重ねてきたことで、多くの生徒が40語程度のまとまりのある文を書くことができていた。ペアで質問をし合う際には、質問の意図を明確にしておく必要があったのではないか。」「過去1年分のデータではなく、3年間分のデータから考察している点があった。何足入荷するかを予測する際には、相対度数を確率とみなして用いていることについてもっと丁寧に指導する必要があったのではないか」などの意見が出されました。

よりよい解決や結論、表現を求めて…

英語科

書くための思考を形成するためには、書くことの言語活動の中で、自分の考えや思いを整理、形成、再構築していくことが重要です。そのためには他者との関わりの中でライティングとシェアリングを繰り返し行うことが必要です。そうすることがよりよい内容・表現の変容につながっていくのです。



シェアリングの際は、お互いの質問が相手の内容の質的向上を後押ししていることが重要です。

1年生が表現の質を高める質問を出すのは大変難しいので、気付かせたい視点を生徒の表現例を黒板に書いて可視化したり、チェックリストを用いてアドバイスしたりするなど、生徒が目的的に思考して表現することができる指導の充実が求められています。

数学科

よりよい解決や結論を見いだすには、データに基づいた判断や主張を批判的に考察することが有用であり、結論を出して終わりにするのではなく、別の観点から見直してみることが大切です。例えば、異なる結論が出せないかどうかを考察することや、観点を変えて整理し直してみたり、様々な視点からデータの特徴を捉えたりする等、そのデータの傾向を読み取り判断する過程が妥当なものであるかどうかを振り返ることが考えられます。このような活動を充実させることが第三者の主張について、信頼できる根拠を伴ったものであるかどうか等、多面的・批判的に考察することにもつながります。

提案授業から見えてきたこと

今回提案授業をさせて頂いた中で、まずは子供たちの課題を分析し、指導のプロセスを大きく変更しました。その中で、私たち教員の教材に対する見方が変わり、子供の姿が変わっていきました。付けたい力を育成するために、どのようなプロセスで進んでいくのかを考えながら、他の単元も描いていきたいです。

中島 夢翔 教諭

「もっと違う見方をしたい」、「違う資料が欲しい」と批判的に捉えることのできる生徒を育成し、生徒の疑問等を単元や授業に生かすことで、自然な流れでPPDACのサイクルを回すことができるようになる必要があることを学びました。

辻田 文弥 教諭

参加者の声

- 統計を中1から中3まで段階的に学んでいくうえで、先を見据えた指導を計画していかなければならないと感じました。
- 単位時間ごとのつながりや生徒が解決したくなる問いの設定、単元をつくっていくことの大切さを学びました。
- 批判的思考を育てる授業づくりが必要であると思いました。
- ただシェアリングするだけでなく、「内容を高めるため」という視点を示して、生徒に意識させることで、ペアのやりとりが意味のあるものになることに気付きました。
- 中間評価の大切さ、有効性を感じました。個人→全体共有→個人を繰り返し行うことで生徒の知識、表現が増えていたので、自分の授業に取り入れていきたいです。

check ! 子供の期待に応える学びをともにつくりませんか

次回 令和2年5月1日(金) 教材研究会 午後から